

シリーズ「遺跡を学ぶ」

161

石製模造品による 葬送と祭祀

正直古墳群

佐久間正明

新泉社



石製模造品による 葬送と祭祀

— 正直古墳群 —

佐久間正明

【目次】

第1章 真つ赤に塗られた石棺	4
1 正直二七号墳	4
2 開かれた南箱式石棺	8
3 未開封の北箱式石棺	13
4 葬られたのは誰か？	20
5 正直二七号墳の年代を推理する	25
第2章 多彩な正直古墳群	28
1 最大の円墳二一号墳と前方後方墳三五号墳	30
2 さまざまな中期古墳	34
3 継続して副葬された石製模造品	43
4 正直古墳群の推移	46
第3章 正直古墳群と同時代の集落	50
1 清水内遺跡	50
2 清水内遺跡に住んだ人びと	59
3 清水内遺跡の展開と正直古墳群	63
第4章 大安場一号墳と建鉾山祭祀遺跡	65
1 大安場一号墳	65
2 建鉾山祭祀遺跡	74
第5章 正直古墳群の意義	82
1 下位首長層の墳墓	82
2 石製模造品と葬送儀礼	85
3 正直古墳群の重要性	89
参考文献	92

編集委員

勅使河原彰(代表)

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵



図1 ●正直27号墳南箱式石棺（東より）
石棺の内側は真っ赤に塗られている。床一面に礫が敷かれ、その下に20～30cmほどの扁平な河原石が敷き詰められている。

第1章 真っ赤に塗られた石棺

1 正直二七号墳

偶然発見された石棺

一九七〇年の年の瀬も押し迫った一二月、ブルドーザーが開墾を目的として林の中で掘削をはじめると、箱形に構築された凝灰岩の石組が顔を出した。当初、内部が真っ赤だったので炭^{すす}かと思われたものの、炭^{すす}とは明らかに異なる構造のため掘削は止められ、地権者から郡山市の文化財担当者に連絡が入った。そこは、福島県郡山市南東部の田村町^{しやうじま}正直にある、正直古墳群の二七号墳として登録されている場所だった。

現地へ向かった担当者が目にしたものは、内部が真っ赤に塗られた箱式石棺であった（図1）。ただちに工事は止められ、緊急調査がおこなわれることになった。

調査が進むにつれ、東北地方における古墳時代中期（五世紀ごろ）の古墳では他に類をみないほどの質と量を誇る副葬品が認められていたことが明らかとなった。さらに、その後の研究の進展にともない、古墳時代中期におけるこの古墳の位置づけが少しずつ明らかとなるにつれ、「簡素な」という印象は再考を余儀なくされていくこととなったのである。

式石棺」とされた。

調査の際に担当者が最初に受けた印象は、「鏡などがなく、簡素な東北を感じさせる遺物だけ」というものだった。しかし、調査が進むにつれ、東北地方における古墳時代中期（五世紀ごろ）の古墳では他に類をみないほどの質と量を誇る副葬品が認められていたことが明らかとなった。さらに、その後の研究の進展にともない、古墳時代中期におけるこの古墳の位置づけが少しずつ明らかとなるにつれ、「簡素な」という印象は再考を余儀なくされていくこととなったのである。

緊急調査によって、二七号墳の墳丘は直径二六メートル、高さ二メートルの円墳で、幅二メートル、深さ一メートルの周溝が確認された（図3）。一二月一六日から二二日という短期間の調査であったため、墳丘構築方法の解明には至らなかった。

発見された石棺は二つ、南北に並列するようにみつきり、それぞれ「南箱式石棺」と「北箱式石棺」とされた。

古墳時代中期の円墳

郡山市の南東部には阿武隈川とその支流の谷田川により形成された沖積地が広がり（図2）、

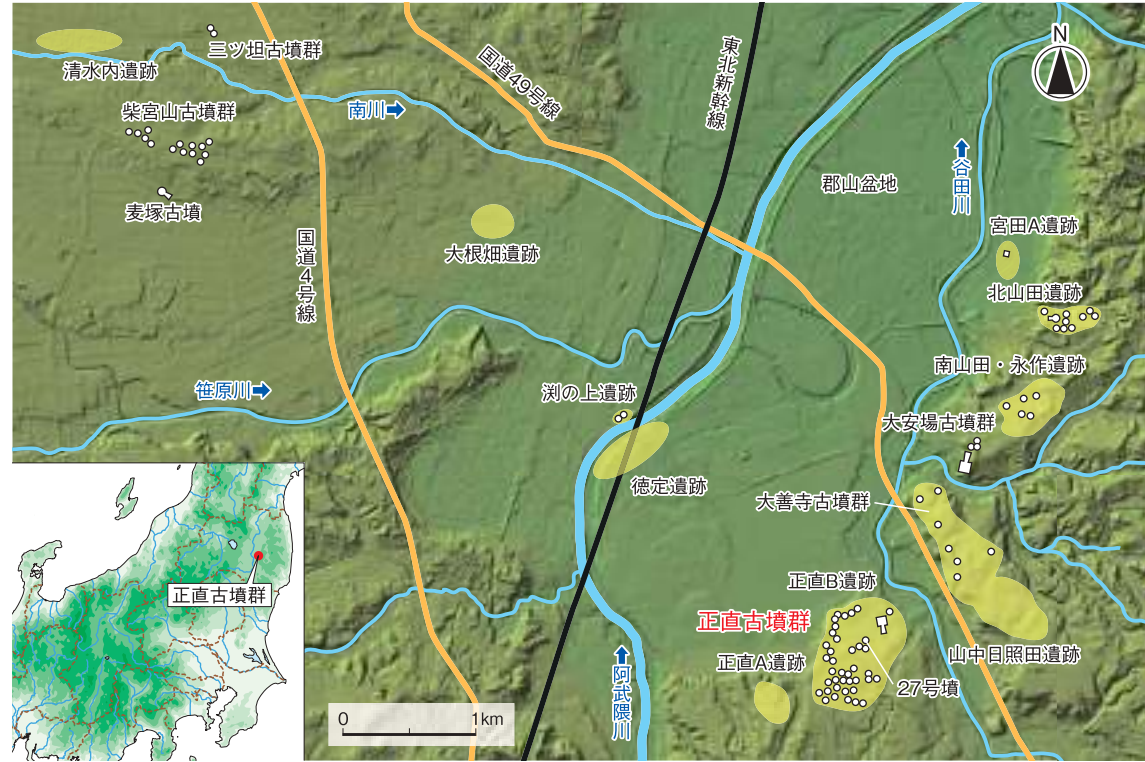


図2・郡山市南東部の主要遺跡と正直古墳群（南より）
郡山盆地南東の丘陵上には正直古墳群をはじめとする古墳時代中期の古墳・集落が数多く分布する。集落の東側の丘陵では石製模造品の材料となる蛇紋岩・滑石が採取できる。

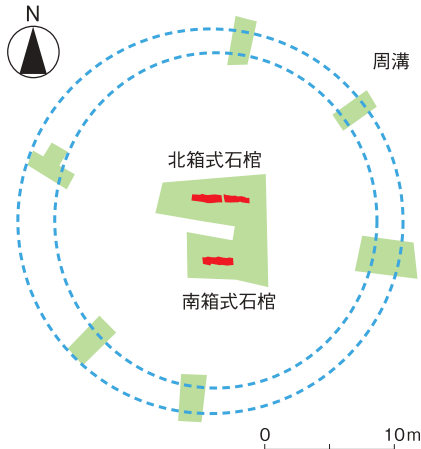


図3・正直27号墳の墳丘と遺構（緑部は調査区）

2 開かれた南箱式石棺

崩落した蓋石

墳丘中央から南寄りに位置する南箱式石棺(図4)の東側半分では、遺体を埋葬したあとのいずれかの時点で蓋石の一部が割れて崩落したため、蓋石とともに土砂が流入して埋もれていた。担当者が現地に着したとき、棺の底に敷き詰められた小礫や多量の石製模造品は、この土砂とともにすでにとり上げられ、残念ながら遺物の出土状況は不明であった。石製模造品とは、滑石あるいは蛇紋岩とよばれる軟質の石材から、農工具(刀子、斧、鎌)・武器・武具・容器などさまざまな器物をかたどってつくられているもので、祭祀に使用されたものと考えられている。西側はわずかに蓋石が残っていたため、遺物は元の位置を保った状態で残されていた。

この南箱式石棺は、板石を横長に立て並べて側壁を構築し、蓋石でおおっていた(図1・5)。石棺の南北両側壁上に扁平な石を据え、石棺中央部に扁平な石を蓋として

てのせている。石棺の規模は、内側中央部で二五九×四九センチ、床面からの高さは五五センチである。石棺に使用された石は、加工しやすい安山岩質溶結凝灰岩である。床面は礫敷で、遺物をとり上げたあとに礫を掘り下げると、扁平な河原石が敷き詰められていた。

この南箱式石棺には人骨が残っていないかった。日本の土壌は酸性土のため、流入した土砂に埋もれた人骨は残らなかった可能性が高い。

なお、石棺の短辺は若干東側の幅が広いこと、石製模造品は東側から多数出土していること、つづいて調査された北箱式石棺の状況などから、頭を東に向けて埋葬されたと考えられる。

南箱式石棺の副葬品

刃先を中央に向けた鉄鍬 土砂の流入が少ない西側では中央近くに遺物はなかったが、西壁(被葬者の足側)近くになると遺物が出土しはじめた。南壁と平行になるように刀子が置かれ、南西隅から中央に刃先を向けた鉄鍬が顔をのぞかせた。さらに隅に近い場所から先端を中央に向けた鉄鍬が出土し、反対側の北西隅からも、同じように中央に刃先を向けた鉄鍬が副葬されていた。鉄鍬



図4 ● 正直27号墳の埋葬施設(東より)
南箱式石棺(左)は蓋石が石棺内に崩落していた。北箱式石棺は蓋石の長軸が4.8mにもなる大きなものであった。

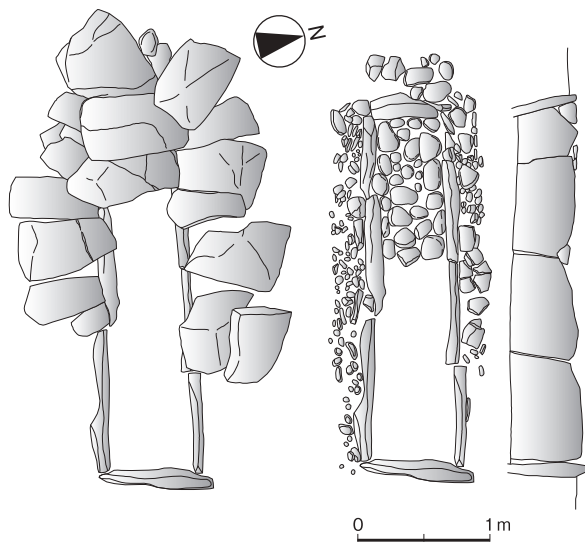


図5 ● 南箱式石棺

の数は北西隅・南西隅それぞれ一〇点である。出土位置からみても矢柄が接続していたとは考えられず、鍔身部のみが先端を中央の被葬者に向けるように方向をそろえて副葬されていたことになる(図6)。

石製模造品 石棺の西端から有孔円板(鏡の模造品)が三点出土したが、とり出された土砂を選別すると、小礫にまじって石製模造品が多数含まれていることがわかった。その数は、刀子形六点、斧形一点、剣形一九点、有孔円板二四点である(図7)。

古墳時代の刀子は、革製あるいは木製の鞘と鉄製刀子からなる。鞘は、革を重ね合わせた端の部分に貫通孔をうがち革紐で綴じ合わせ、方形突出部につり下げするための革紐をつり付ける。刀子本体は木製あるいは鹿角製の把に鉄製の刃を差し込む。こうした刀子を石でかたどったものが、刀子形石製模造品であ



図7・石製模造品
刀子形は、鞘に装着された状態をかたどり、突出部に革紐をつけるための孔が二つうがたれている。剣形の大半は、両面に鍔(しのぎ)が表現された精巧なつくりのもの。

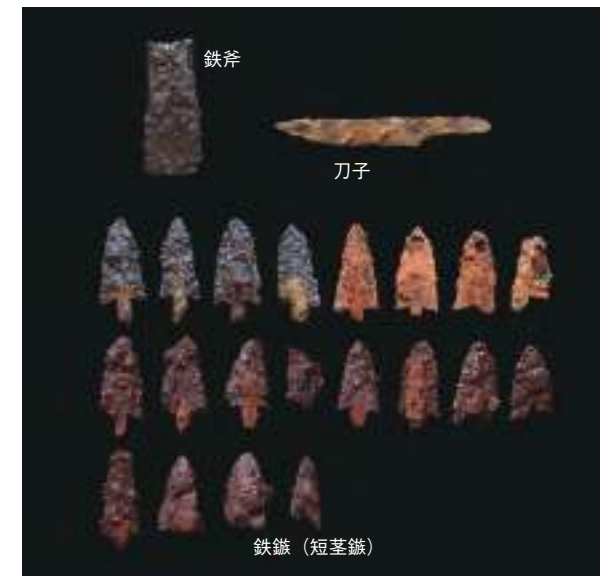


図6・南箱式石棺遺物出土状態(上)と出土した鉄斧・刀子・鉄鍔(下)
鉄鍔と鉄斧および有孔円板は、石棺西端から出土した。西壁の南北両隅から10本ずつ出土した鉄鍔は、鉄斧とともに刃を中央に向けた状態で確認された。

る。二七号墳の刀子形は、石材が緑色を帯びた青色で、いずれもきわめて似ているため、同一母岩からつくりだされたと考えられる。

斧形は非常にいいねいな整形で、袋部は中央に両面から穿孔された大きめの貫通孔と、片面から袋部に貫通する小さめの穿孔がみられる。この片面の中央には、縦に線刻状の痕跡がみられ、鉄の板を折り曲げた際に生じる袋部の合わせ目を表現した可能性がある。器面には両面ともに非常に弱い工具痕が観察される。光沢があり、きわめて平滑に仕上げられている。

剣形は鉄剣をかたどったもので、基部に紐を通すための貫通孔がみられる。二七号墳の剣形の大半は、両面に鑄を表現し、断面形が菱形となる精巧なつくりである。

有孔円板は鏡を原型とし、円形の中央部に紐通し孔を表現した貫通孔がみられる。この孔の数から、単孔と双孔とに大別される。

古墳から出土する石製模造品は、刀子形＋斧形＋鎌形を基本セットとする。これに対し祭祀遺構では剣形＋有孔円板＋勾玉のセットが基本となる。そして、古墳に副葬される石製模造品の編年は、剣形と有孔円板を含む組成は比較的新しいとされている。また、個別の形態に着目すると、中位に鑄のある剣形は、型式学的に古いとされている。

南箱式石棺の石製模造品は、組成の面では新しい要素がみられるものの、剣形は大半が両面に鑄を有する古い形態に属しているなど、新旧両方の要素が混在している。このことが年代の把握をむずかしくしており、正直二七号墳の年代を確定するためには石製模造品の詳細な分析が必要であった。

3 未開封の北箱式石棺

長大な北箱式石棺

北箱式石棺は未開封だったので、まず石棺の全容を確認するために、東から蓋石を調べた(図8)。蓋石は最大二メートルにもなる板石を何枚も用い、その長軸は四・八メートルにもおよび、一般的な箱式石棺の蓋にくらべ長大であった。蓋石を移動させていくと、中央部で板石により仕切られていた(図9)。そこでこの仕切り石の西側を「西側埋葬施設」、東側を「東側埋葬施設」とした。石棺の全長は四・五メートルである。

石棺の側壁は板石を縦長に立て並べられていた。先に調査した南箱式石棺の側壁は横長に板石を用いており、明らかに異なる構造である。石棺内部は全面が真っ赤に塗られていた。板石の隙間は粘土で目張りされ、その目張り粘土までいねいに赤彩されている。両埋葬施設ともに土砂の流入はなく、遺物の遺存状態は良好であった。

なお、石棺に使用された石は、南箱式石棺と同じ安山岩質溶結凝灰岩であった。

この北箱式石棺では、南箱式石棺と異なり人骨が残っていた。蓋石をとり上げた際に目にしたのは、全身が茶色い毛でおおわれた人の形をしたような物体であった。人骨は植物による侵蝕がはげしく、内部の海綿質だけでなく骨表面のかたい緻密質まで植物の根によって侵蝕され、骨全体が根に包まれるようになっていたのである。